

被災地に向き合って7年

「復興の日まで実行委員会は活動を続けます。」そう決意した有志が立ち上げた東日本大震災被災地応援実行委員会は、7年目を迎えた被災地の復興状態に心痛めている。世論調査によれば、「復興が進んでいない」と答えた人が52%・「順調にすすんでいる」と思っている人が5.9%だった。

慈しみ深い神、慰めの主よ、いま、わたしたちは3月11日、7周年を迎えた東日本大震災を覚えて祈ります。どうか被災地にある人、避難生活を強いられている人、特に日本社会の中で生きることの困難に苦しむ人、将来の希望を見出せない人を支えてください。また原子力発電所事故により、失われた自然と人々の生活を覚えます。故郷を離れて生活する人、危険な作業に従事する人とその家族をお守りください。そして政治と社会に責任を持つ人々に正しい道を歩ませてください。わたしたちもまた、これらの苦難をつねに覚えることができますように。さまざまな団体・人々による被災者支援の働きを強めてください。そしてわたしたちも思いと力を合わせて、共に歩み続けることができるように導いてください。

いのちの源である主よ、東日本大震災のすべての犠牲者、そして世界各地の災害と争いの中で生命を失った人々を、あなたのみ腕の中に抱き、永遠の安らぎを与えてくださいますように。主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。アーメン (チャプレン 古本 みさ 先生)

3月9日(金) 全校朝礼で、被災地を思いお祈りしました。

(社会科 金井安弘 先生)

5月の東北は桜と新緑が一気にやっで、絵のように美しい。満開の桜を見ながら景色が一変した。へしゃげた家、がれきた船、地盤沈下で水浸しの道路や埠頭、そして一もう言葉ではいいつくせない。ボランティアセンター

道路わきには、家々からかきだされた泥の袋が山積みになされ、所狭しと並んでいる。泥は家の床の上30センチくらいはたまっている。泥の中には死んだ魚が埋もれており、ヘドロと魚の匂いがきつい。こんな匂いは映像では伝わらないだろう。床が終わると縁の下に入って泥を出すのだが、これが一番の重労働だった。そのしんどい作業を20代の若者たちが率先してやってくれる。泥水は家の壁の隙間にも入り込んでいる。雑巾でふいてもふいても泥水のあとが消えない。

作業をしている中で住民の方にこういわれた。「せっかくきれいにしてもらった家だけれども、潮をかぶったんでもう住めないかもしれない。でも、自分の家がきれいになっていくのを見ると、救われるような気がする。」一人ひとりの力は小さくても、たくさんの方が集まると、被災者を支える力にもなれる。それがボランティアなんだと改めて思った。帰りぎわにボランティアセンターの方に職業を聞かれ、学校の教師といたら、「それならこの様子を、子どもたちにちゃんと伝えてほしい。」といわれ、あっちこっちを見せてもらった。その後、何度かボランティアにかかわった。やることは現地の復興の状況に応じていろいろ変わったが、忘れることのできないことばかりだ。けれども気仙沼での体験が私の出発点なんだと思っている。

祈

てきたよう

ながら気仙沼駅で下車、駅を出て海側に下るとの山、ひっくりかえった車、壁に突き刺さった真っ黒焦げになって港に繋がれている漁船一



(理科 岩間徹 先生)

「東日本大震災7年目をむかえて思うこと」

東日本大震災は日本近辺で起こった観測史上最大の地震と津波により1万8000人を超える死者・行方不明者を出した最大の自然災害である。さらに、津波により福島原発のメルトダウンが起こり、放出された放射能の影響は数十年以上に及ぶ。震災後7年経った今、津波の被害地域の復興は道半ばであるし、福島では放射能汚染のため帰ることのできない地域が依然として存在する。

津波の被害と原発の放射能汚染についてはやりきれない思いがある。何度も津波を経験してきた地域で、これまで経験したことのない大きく長い揺れを感じたときに、速やかに高台に避難できなかった人たちがいたのは何故なのだろう。犠牲者の9割以上が津波にのみこまれた人々である。

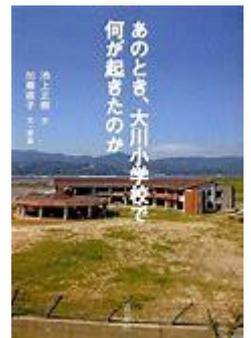
事故後7年経っても原発敷地外に放出された放射性物質を回収できない地域が残り、放射線を含む汚染水を止めることもできず、メルトダウンした炉心の状態を見ることさえできないのに、防げたはずの放射能汚染を「想定外」で免罪し、再び同じ歩みを続けようとするのは何故なのだろう。科学は生活を豊かにする未来を照らし、様々な技術を社会にもたらすものなのに、何故役に立たなかったのだろうか。地球上で最も厳しい地殻変動を起こす<自然豊かな>地域で暮らすためには、正しく自然を理解すること、生活を支える社会の存在の大切さをこの震災は教えてくれている。

西日本に住んでいるわたしたちは、これからどんどん近づいてくる次の南海トラフを震源とする地震への備えをしなければならない。東日本の復興をささえながら、何を「備え」なければいけないか。一人ひとりがこの現実に向き合うことで、被害は最小限に食い止められ、次の豊かな社会へつながるのではないだろうか。

(国語科 今村雅子 先生)

2013年の夏、娘と2人、レンタカーを運転して回りました。「次、どこ見とこ」式の旅で、74人が亡くなった大川小学校もその1つ。海から5km近く離れ、地震発生から約50分もあったのに…とよく知られてはいましたが、のっぺらぼうの校庭に立つと、ここが平女なら海は京都駅ぐらい、私は何をしようと思いました。

山あいを黒々と埋め尽くすフレコンバックも、何カ所も見ました。大川小学校に象徴される「津波の巨大な破壊力による喪失」と「原発事故による喪失」の大きさを比べることはできませんが、1000年に一度と言われる津波から無傷だったのに、立ち入ることもできなくなった場所が、京都で言うなら南区・伏見区・下京・中京・上京・北区…よりもはるかに広い(何でも身近なものに置き換えてみるタチ)とあとで調べた時、それにもまた呆然とする思いでした。東日本大震災被災地応援実行委員会の活動も、本当に長いですね。「被災地を忘れない」が、「自分たちの国のことを自分の頭で考える」につながるように願っています。



(体育科 山本嘉代 先生)

「風化させないために」



2013年8月、私は、東日本大震災で大きな被害を受けた、宮城県の気仙沼、奇跡の一本松のある岩手の陸前高田を訪れました。震災から3年半が経っていましたが、想像していたよりも復興しておらず、ショックを受けたことを今も覚えています。ただ、ショックを受けはしたものの、私自身が直接的に被害を受けておらず、その苦しみや悲しみを想像することしかできませんでした。その時は、何か自分でできることを続けてやっと思いこうと思っていたけれど、何もできないままあの日から7年目を迎えてしまいました。まだまだ支援を必要としている方は多く、復興にはほど遠い状況のところもあります。今回この原稿を書く機会を頂き、当時、訪れた写真を振り返り、忘れてはいけないなということを再認識しました。平女には被災地を思い続ける活動があります。その意味をしっかりと考えて自分のできることを続けていければと思います。